

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	上位目標：先住民の子どもたちが、他の子どもたちと同様に学び遊ぶことのできる環境が整備される 達成度：先住民コミュニティ、公立小学校、行政官・ボランティア等の関係者への働きかけを行ったことにより、全体的に先住民児童の教育環境が改善され、児童が学校に行きやすいような環境が整備されたと言える。事業の取り組みによって、就学前教室への出席率、学年末試験の合格率等については高い数値が維持されている。他方、児童の平均出席率については低下の傾向があり、家庭の環境や精神・健康上の問題があり学校に通えていない、または試験を受けていない児童が数名確認されている。例外なくすべての子ども達が教育を受けられるように、引き続き教師や SMC（学校運営委員会）メンバーによる家庭訪問等を通して、個々の児童のフォローアップを行っていく必要がある。 また、ダッカ市内で行われた国レベルのセミナーでは、中央政府の関係者に加え事業地のコミュニティメンバーなどが出席し、闊達な意見交換がなされた。初等教育大臣、初等教育局長らが自らセミナーに出席し、本事業の対象者の声に耳を傾けたことは大きな成果であり、今後中央政府関係者が先住民に配慮した教育環境の普及に積極的に関わるようになることが期待される。
(2) 事業内容	1. 先住民コミュニティへの働きかけ 1-1. GBK による先住民コミュニティモニタリング訪問 対象コミュニティ 14 カ所に対して、GBK スタッフが延べ 664 回のモニタリング訪問を実施した。各コミュニティにおける継続的なモニタリングを行いつつ、子どもたちの学業状況、地方行政の福祉制度、所得創出活動の実施状況等について話し合う機会を設けた。 1-2. CLC への CM 配置 対象コミュニティ 14 カ所に CM を 1 名ずつ配置し、先住民の子どもたちに対して CLC にて定期的に補習授業を行った。 1-3. 地域住民の伝統行事等イベントの開催サポート 対象コミュニティ 14 ケ所のうち、12 ケ所において、本事業から一部開催支援する形（イベント開催経費全体の 68%を先住民民族コミュニティが負担）で、地域住民の手によって伝統行事等のイベントが行われ、先住民以外の地域住民もこれに参加した。 1-4. CLC を利用した会合等の開催サポート 対象コミュニティ 14 ケ所において、延べ 14 回の会合を開催した。小学校での期末試験の状況や子どもたちの通学状況等について、保護者に対して情報共有されたほか、所得創出活動の実施に関する話し合いが行われた。 1-5. CLC の修繕や補強、補習に必要な教育資材投入 事業対象である CLC14 ケ所のうち、建物の補修が必要な 11 ケ所において、全て補修作業と室内の教育資材投入を完了。先住民コミュニティの住民たちの協力を得ながら作業が進められ、地域住民と ODA の支援を得て補修されたことを示すサインボードを設置した。 2. 公立小学校（教員、SMC）への働きかけ 2-1. 事業対象公立小学校における SMC の定期会合開催支援 対象校 14 校の SMC における主要なメンバー延べ 143 名と継続的に連絡を取り合い、SMC 会合の定期開催の動機づけや、通学が不規則になっている子どもたちの状況共有を行いつつ、計 7 回定期会合開催支援を行った。 2-2. 学校行事開催サポート 学年集会が対象校 14 校で 2 回ずつ行われた。ベンガル人世帯と先住民

族世帯の子どもたちがともに参加し、お互いについて理解し合う機会となった。また、各校で運動会等の行事で先住民文化を取り入れた競技が行われたほか、壁新聞の作成が継続的に進められ、児童が楽しく文化の多様性について学ぶ機会が設けられた。2-3. CMによる小学校教員の指導補助

対象校 14 校において、毎日 CM（ベンガル 3 名、先住民 11 名）が先住民の子どもたちの通学に付き添い、学校では主にプレ・プライマリ（翌年小学 1 年生に上がるクラス）の子どもたちの指導補助を行った。授業では、ベンガル語、英語、数字、詩や歌を教えた。

2-4. SMC メンバーや小学校教員による家庭訪問、保護者との対話支援

対象校 14 校において、通学の滞りがちな先住民の世帯への家庭訪問を実施。プロジェクトメンバーによる働きかけの結果として、学校教師による家庭訪問が 108 回、SMC メンバーによる家庭訪問が 133 回行われた。また、教師による保護者会の開催支援の結果、合計 25 回の保護者会が行われ、児童の学期試験の結果状況の共有や保護者に対して児童に規則正しく昼食を提供する大切さについて話し合いが行われた。

2-5. SMC 間での経験共有

SMC 間での経験共有会合が 1 回行われ、対象となる 14SMC（各校に SMC が一つ）のうち、5 つの SMC から合計 10 名のメンバーが参加した。会合では児童の学習状況や SMC での取り組み内容等について情報交換がなされた他、SMC が主体となって臨時教師を雇うことについても意見交換が行われた。

3. 行政、先住民ボランティアの巻き込み

3-1. 県教育事務官との定期会合実施（半期）

県教育事務官との定期会合は、県事務官側の日程調整が難航したため、本事業期間中に開催することができなかった。ただし、日常的に県行政官と連絡を取り合い、関係構築に努めた結果、2017 年 12 月には県初等教育事務所主催の教育フェアに GBK が無償で出展が認められ、GBK の取り組みと先住民の文化を発表した。

3-2. 郡初等教育事務官との定期会合実施（四半期）

郡初等教育事務官との定期会合は、当該事務官が多忙のためスケジュール調整がつかず、実施できなかった。ただし、Upazila Resource Center（郡の学校教師向け研修センター）のインストラクターが複数回に渡って先住民世帯を訪問して、保護者に対する啓発や子どもたちに対するコーチングを行った。

3-3. ユニオン議会主催の NGO 調整会議出席

事業期間中、計 8 回の NGO 調整会議に出席し、参加者との情報交換を行ったほか、本事業の実施状況について適宜報告を行った。

3-4. ユニオン行政官が事業地訪問し、先住民世帯の現状を理解するよう促す

本事業期間中、延べ 77 名のユニオン行政官と連絡を取り合い、結果として延べ 93 名が計 103 回、先住民世帯の訪問を行った。ユニオン側からは、先住民世帯もナショナルスマート ID カードを入手した方がよいといった助言や、貧しい世帯や寡婦、障害者を対象とした生活補助金、井戸・トイレ設置補助金といった制度に関する情報提供が行われた。

3-5. ボランティアによる地域住民啓発活動等のイベント開催を促す

本事業期間中に、事業地の近隣に所在する現地大学生によるユースボランティアのうち、計 27 名に対して働きかけを行い、結果として合計 8 名が先住民コミュニティを訪問した。その際、先住民のユースボランティアは、母親に対する教育啓発セッションやフィルムショーの上映を行った。また、ベンガル人のユースボランティアもコミュニティを訪問し、保健衛生に関する啓発セッションを実施した。

	4. 包摂的な教育環境醸成の必要性を訴えるアドボカシー活動 4-1. 先住民に配慮した教育がカリキュラムでも考慮されるよう県行政に働きかける 4-2. 教育関連アクターに対し、先住民に配慮した教育について意見交換をする 4-3. メディアキャンペーンの実施 これら3つの活動として、2018年3月にダッカの外国人の居住が多いエリアにて国レベルセミナーを開催。当日は、チーフゲストとして初等教育大臣、初等教育局長、国際母語研究所長、及び在バ日本大使館より参事官が出席。JICAからは職員1名と専門家1名の2名。NGO業界からはBRACの教育事業担当者2名。ジャーナリストが1名。GBKからはプロジェクト担当者の他、事業地の小学校校長、SMCメンバー、CLCの代表者などが出席。合計約30名。 同日にダッカ市内でINGO関連のイベントが重なったため、NGO関係者の出席が低くとどまったが、初めてダッカに出てきたというSMCメンバーが教育大臣に堂々と意見を伝える姿が印象的であった。教育大臣は「資金と訓練された教師不足は現状では如何ともし難く、引き続きNGOの協力を得たい」「保護者は子どもに昼食を持たせて学校へ送り出して欲しい」などと述べた。翌日のメディア掲載は4件（bdnews24, Dhaka Tribune, Ittefaq News Paper, Newage）。 4-4. モニタリング・評価 専門家（小松）が2018年2月に現地を訪問し、モニタリングを実施した。事業の進捗状況を確認し、プロジェクト運営についての助言を行った。また、専門家（大橋）と事業統括・担当者を中心に事業評価が2018年3月に実施された。CMの役割や行政の巻き込み方によって生み出された効果が特に評価され、データ管理、分析についてのアドバイスが提供された。
（3）達成された成果	成果①：先住民の子どもたちの補習教室として適切な環境整備を各先住民コミュニティが担う ● 指標1：2年目事業から新たに対象となった7先住民コミュニティにおいて、対象となる先住民の子どもたち全員が就学前教室に通う。 →対象となる先住民族の子どもたち26名のうち、25名（96.1%）が就学前教室に通った。入学できなかった1名は身体的な障害があり、両親が入学を諦めたもの。 ● 指標2：公立校（14校）における先住民の子女の平均出席率が96%以上 →対象14校における先住民族の児童たちの2018年の平均出席率は86.4%となった。2017年の94.8%から低下しているが、これは2018年に入ってから活動地域に電線が敷設され、日常的に電気を使えるようになった結果、児童がTVに夢中になって通学が疎かになったため。生活は便利になったが「時間を決めてTVを見る」といった習慣や経験がこれまでなく、環境の変化に対応できなかったものと思われる。 ● 指標3：事業対象地内14校における先住民族の子どもたち（1年生～5年生）の学年末試験受験率が100%となる →2017年12月の学年末試験受験率は97.8%（274名中268名）となった。未受験の6名は、いずれも家庭の事情や健康上の理由によって受験することができなかったため。 成果②：14の公立小学校が、先住民の子どもに配慮した教育環境作りに自発的に取り組む

	● 指標 1：事業地において、2017 年学年末試験に出席した先住民の子女の合格率が 90% →2017 年 12 月の学年末試験（5 年生卒業試験）では、先住民の子ども 28 名中、26 名が参加し、26 名が合格した（合格率 100%）。受験できなかった 2 名のうち、1 名（男子）は習慣的にアルコールを摂取し、かつ日雇い労働に従事していたため、もう 1 名（女子）は、家庭の問題から精神的な病にかかり、学業継続ができなくなったため。 ● 指標 2：公立校(14 校)において、教員と SMC が、不登校者や成績が芳しくない先住民の子女へ家庭訪問を毎月実施し、通学を促す。 →プロジェクトメンバーによる働きかけの結果、学校教師による家庭訪問が 108 回、SMC メンバーによる家庭訪問が 133 回行われた。教員と SMC メンバーが手分けして毎月家庭訪問を実施した。 成果③： 県・郡・ユニオン行政、および先住民ボランティアがそれぞれの立場から先住民の初等教育環境を向上するためのアクションをとる。 ● 指標 1：県初等教育事務官・郡初等教育事務官がそれぞれ 1 か所以上の学校および CLC を訪問する。 →先方とのスケジュール調整がつかず、県・郡教育事務官による現場訪問は実現しなかったが、郡リソースセンターのインストラクター（学校教師向け研修講師）が先住民族コミュニティを訪問し、保護者に対する啓発や子どもに対する補習を実施した。 ● 指標 2：先住民ボランティアが、自発的に先住民の子女を対象とした学習会等のイベントを一回以上開催する。 →業地の近隣に所在する大学から、2 つのユースボランティアグループ、合計 8 名が先住民族コミュニティを訪問した。その際、先住民族のユースボランティアは、母親に対する教育啓発セッションやフィルムショーの上映を行った。また、ベンガル人のユースボランティアは、保健衛生に関する啓発セッションを実施した。 成果④： 本事業が実施してきた事業成果の事業対象地外への共有 ● 指標 1：少なくとも 2 つのメディアにおいて、本事業の活動内容と成果が報道される。 →国レベルセミナー開催を通して、4 件のメディアに本事業の活動内容と成果が掲載された。 ● 指標 2：事業対象地外から本事業の視察希望者が 1 組以上訪れる。 →事業地外から本事業の視察希望者が訪れるという実績は得られなかった。
(4) 持続発展性	本事業は 3 カ年事業の 3 年目であるが、当該期間を通じて本事業が目指してきたのは、NGO がサービス提供者としてではなく、保護者、学校関係者、先住民コミュニティ、地方行政といった、いわゆる”Duty Bearer” がその本来の役割を果たして行けるように啓発と側面支援を行うというものである。 事業成果を見るに、本来の目論見に沿って子どもたちを取り巻くステークホルダーたちの間の結びつきを強めることができたと考えられる。本来果たされるべき制度や枠組みの中で結ばれたつながりは、今後成果の持続発展性、すなわち子どもたちが学業を継続できる可能性を高める装置として機能することが期待される。 しかしその一方、本事業上の成果指標には設定していなかったものの、各小学校の学年ごとの子どもたちの学業成績（進級率、留年率、落第率）を見るに、必ずしもすべてが向上しているわけではない。本事業を通じて構

	築された「教育環境の改善」だけでは、最終的な子どもたちの学業成績向上まで実現するのは困難であることが明らかとなった。 2030 年を期限とする SDGs では、全ての子どもが初等教育を修了できることが目標の一つとして定められている。しかし学校の教育現場だけにこの責任を果たしていくことを求めるのは酷であろう。今後、学校や行政が教材・教師・学校設備といった側面からも教育の質を高める取り組み（認知能力向上）を行いつつ、家庭や地域住民も共に子どもの能力（非認知的能力）を高める取り組みを行っていくことが重要になってくると思われる。
--	---